



# 内藤 寿七郎

—「子育て支援」の礎を築いた先達—

白梅学園大学子ども学部教授 金田 利子

はつめい

「臨床で、あるいは子育ての現場で、内藤は、子どもや親と向き合うことを一貫して大事にしてきたが、併せて日本小児科学会や日本小児保健学会、日本新生児学会などの役職を歴任し、小児医学や小児保健学の学術研究発展のためにも、献身、努力をしてきた。また、白梅学園短大の教授として、保育を学ぶ学生の教育にもあたってきた。」

これは、比較的最近出版された丹羽洋子（育児文化研究

所長）著『小児科医者内藤寿七郎物語』（赤ちゃんとママ社・A5判239頁堅表紙2003年）の一節である。

この一文に目がいったとき、筆者は、児童学科の学生の頃平井信義先生に連れられてよく実習に訪れたことのある愛育研究所の当時の所長であり、その後シユバイツァー博愛賞を受賞された、かの内藤先生もまた、ここ白梅学園を支えてきたお一人なのだということに、言いしれぬ感動を覚えた。（そのことを本誌の編集長である田村事務局長にお話ししたところ、この連載の執筆を依頼されるに至

った次第である。)。

そして、足跡がそのまま、子ども・子育て・小児科学の20世紀史を語っているとされる上記の『内藤寿七郎物語』を一気に読みほした。

この書物は、「内藤」の足跡とともにその歩まれた時代の社会的な年表も作成されており、今、子ども学に携わっている人々にとっても、先生よりも年上の人を除き、すべての人がこの「内藤」の歴史と重なった時代を生きているという点から、また筆者もその一人であるが比較的若い60歳代の人にとっては、その父母の時代を、さらに、より若い人にとっては祖父母の時代をも重ね合わせて照覧できる点からも、先生の歩みをもとに、21世紀のこれからに向けて、子ども学の20世紀を、世代を超えて顧みるまたとない参考書ではないかと考えられる。

本学において子ども学部誕生の今このときに、小児科学から出発し、親と子の暮らしに焦点を当て、子ども・子育ての実践と科学を結合しまさにあるがままの子どもを受け止め、白梅学園の教育に生かしてこられた内藤先生の足跡を、子ども学・保育学の視点から共有したい、そして、これから21世紀の子ども・子育てに学べることを共に考察しあつていく契機になればと願ひ一筆させて頂くことにした。できることなら、今年2005年の10月23日で白寿を

迎えられた先生にも、この共同考察の過程に参加していただき、世代を超えて、子ども・子育ての明日についての考えを交流していかたと願っている。

本稿の作成は、先生のこれまでの歩みについて、とりわけその事実については、現代史における「内藤」を丹念にまとめられた上記の『内藤寿七郎物語』（以下『物語』と略記）をもとに、白梅学園大学・短大で保育原理を担当するとともに本学の「子育て広場」に関わっている者として、筆者からの角度でコメントを加えつつ紹介し、先生の白梅学園での当時のご様子については、当時学生であった身近な同窓生から取材して構成するという手法によった。

先生の表記については、最近『物語』の執筆時期頃の状況および白梅学園の教授としての働き等については「先生」を、子ども時代には「名前」を、小児科医者になられてからの活動については「姓」を敬称略で用いることとする。

### 子育て支援の礎、 小児科医者・内藤寿七郎の子ども時代

先生は、ご自身のことを小児科医ではなく、小児科医者と言われている。そこに、丹羽(上記図書著者)は、「人間が人間と触れ合うというぬくもり」を感じとっている。換言すれば、医師であると同時に一人の生活する人間であ

ることへの主張がくみとれる。そこに人間・医師であることと「子育て支援(内藤の言葉で言えば育児)への関心とが深く関連している」という思想の証しを読みとることができようにも思われる。

以下、この項では、寿七郎を小児科医者へと、そして子ども・子育て支援者へと導いていく契機となる体験の面からその足跡について触れる。

### 〈生育期①〉

―何度もの生死をさまよう病氣と小児科医者への萌芽―

寿七郎は、両親の七番目の子として1906(明治39)年、日露戦争終結の翌年に東京牛込に生まれ、事情で父母の郷里の熊本へ、そして父(軍医)の赴任地等の関係で、鹿児島、遼陽、熊本と移り、小学校3年生から青年時代までを熊本で過ごした。熊本中学から第五高等学校(現在の熊本大学)へ、そして東京帝大医学部小児科へと進む。こう書くとは極めて順調であったように聞こえるが、何度も命を落としそのような病氣にかかりそれを乗り越えてきている。

まず、誕生のときから困難に見舞われた。当時は、乳児死亡率が高く、1000に対して150を越えていた。寿七郎もまた、低体重で生まれ、ひ弱であり、その上、母の心労から母乳が出なくなり、人工栄養法も確立されていない当時「この坊ちゃんに諦めてください」と医師に言われた程

であった。諦めない親の思いから、漢方医を頼り、「乳母を雇うこと」「米の粉を」の両方をとの指示に従って一命を取り留めた。それ以後、スペイン風邪、腸チフス、猩紅熱等にかかり、生死の狭間をさまよいながら、乗り越えてきた。こうしたことは、乳幼児や子どもの死亡率の高かった当時はごく普通の生育状況ではあったが、やがて医者となった寿七郎にとっては、「患者の心を医者的心とするその糧として」こうした経験が確かな力になっていった。

### 〈生育期②〉

―幼稚園での「問題」と子育て支援者への萌芽―

本稿の基となる前出の『内藤寿七郎物語』には、白梅学園の教授になり名誉教授にもなったことは年表にきちんと出てくるが直接白梅での授業等のことが登場するのは、冒頭に引用した部分の他には、次のくだりだけである。それだけに大事にしたく、その部分を引用する。

「寿七郎は、この経験(以下に記述)を、後に、保育者養成の短大、白梅学園短期大学で教鞭を振るうようになってから、卒業していく学生に毎年必ず話した。子どもの心に訴えるのには、大声で叱るよりもはるかに有効なあり方があることを、寿七郎はこの担任から学んだのである。そしてまた、子どもの心を傷つけコンプレックスを抱かせる様な差別、選別がいかに好ましくないことであるかについて

も、これらの体験を通して身をもって感じ取ったのである  
〔Pp.31-32〕」。

ここでの経験とは次のようなことである。日本に幼稚園  
が生まれたのは、東京女子師範学校付設で1876(明治  
9)年である。その後徐々に増え始めたものの、テンポは  
緩やかで20世紀に入っても全国に250園ほどであった。

寿七郎が5歳の年、1911年にもそれほど多く普及し  
ていたとは思われないが、寿七郎は5歳で熊本師範学校附  
属幼稚園に入園した。そのときのトンネルごっこの体験で  
ある。赤組白組に分かれてどれだけ長いトンネルを作れる  
かの競争を楽しむのである。寿七郎が参加していた赤組の  
トンネルは無惨にも早々につぶれてしまった。白組のトン  
ネルは長い見事なものが完成し子どもたちが歓声を上げて  
いた。面白くないと思った寿七郎はできたばかりの白組の  
トンネルを一気に踏みつぶしてしまった。子どもたちの悲  
鳴が上がり、担任の先生が駆けつけた。

寿七郎は大きな雷が落ちることを覚悟していたが先生  
は寿七郎の目ををしっかりと見つめて心に語りかけるように  
「内藤さん、何したの?」と問いかけた。寿七郎は大きな声  
で叱られるよりもずっと深く自らの行為を恥じたという。  
長じてから振り返って子どもと対するときの指針にしてき  
た。

このことをいつも白梅学園の講義で上記のように学生た  
ちに伝えていたという。

### 戦前・戦中の活動：乳児死亡率の低下へ・「子育て支援」 —生活の中でのアクションリサーチ—

東京帝大小児科卒業後は、同大医局の小児科において、  
実に多くの小さな患者たちの命に真摯に向きあってきた。  
この間(1931～37)にも様々なエピソードがあるが、  
紙幅の都合上省略させて頂く。

1933年皇太子誕生を祝って下賜された基金(十財閥  
の拠出金)を基に愛育会が立ち上げられており、同時に幼  
児教育界の先駆者(倉橋惣三)や社会事業家(賀川豊彦)も加  
わって乳児死亡率の減少を目指して愛育調査会が設置され  
た。1938年、内藤は請われて愛育病院の初代の小児科  
長および愛育研究所員として、愛育会に赴任することに  
なった。

そこから、内藤のライフワークとも言える乳児死亡率の  
減少への活動が始まる。そのことは、まさに、この時代の  
「子育て支援」につながっている。

愛育病院では、診療と同時に週2回保健相談日を設けて  
いたが、内藤はこの活動にも積極的に参加し、保健指導を  
重視した。また、愛育会は発足の翌年は雑誌『愛育』を発行

し、執筆陣には内藤自身もその一人であったが、母子に關わる多彩な人々が参加していた。例えば、斉藤潔、廣瀬興、福田竜吉、中鉢不二郎、斉藤文夫、武藤静子、牛島義人、波多野完治、山下俊郎、三木安正、倉橋惣三、柳田国男等々である。ここに、すでに小児科学の他、小児栄養学、児童心理学、障害児教育学、保育学、民俗学などの学際的な参加の状況を見て取ることができる。

『物語』によれば、特に内藤が東大医局で各学会誌の抄録に携わった時、子育て雑誌で抄録すべき物として『愛育』が一番に上げられていたという。ここからも、内藤が、いかに医学と生活・保育の結合に価値を見いだしていたかが分かり、その先見性に脱帽の思いである。

愛育会もまた、時代が専門の細分化に向かおうとしているなかで広い視野をもっており、諸分野の科学の蓄積と生活の知恵を結合して総合的な乳児の健康保持・予防にあたり、その調査の方法にも目を見張るものがあつた。

それは、調査といつても単に質問紙調査ではなく、フィールドにセツルして、健診し、相談し、よりよい生活環境づくり尽力しつつ進める、まさにあるべき方法・アクションリサーチによるものであつた。その方法は「愛育村（あいくそん）」と名付けたモデル村を指定し、しかも最も乳児死亡率の高い地域を指定して、その死亡率の低下を研究

しつつ進める、生きた大きな実験的且つ実践的手法であつた。はじめに全国で5カ所を指定し、回数を重ねて年々数カ所ずつ増やしていくというものであつた。

内藤の尽力はこの愛育村での活動であり、一軒一軒訪問し、生活実態を捉え、栄養指導を中心に展開した。そうした過程で、村民から逆に教わることもあり、それが後の研究課題になつたということもあつた。例えば岐阜の山の中での話であるが、お年寄りが「この頃の母親は米を食うから赤ん坊がダメになる」と。稗や粟や麦を食べていたときの赤ん坊の方が健康だつたというのである。早速愛育会に帰つて栄養部長の武藤静子の協力を得て比較調査したところ伝統食群の乳の方が脂肪が大分多いということが分かつた。柿の葉からのビタミンC



採取などもその一例である。

このようにフィールド活動と研究を車の両輪のように密接に絡み合わせて、乳幼児死亡率の減少へと発展させていった。ちなみに内藤がもつともよくセツルし、「第二の故郷」というほどに村民と深い縁のできた愛育村は、第二回目に指定になった初期からの愛育村で山梨県中巨摩郡源村（現在の南アルプス市）とのことである。

ここに、生活の中に入って一人ひとりの親の要求に応えつつ、診療と支援と研究を結合するという、今日こそ新たな形で不可欠になっている方法による子育て支援実践の先駆的姿が見られる。

愛育会では東京帝大セツルメントからひきつぎ、隣保館の保育も行っていた。戦争が激しくなっていく時期には、その頃行っていた昼夜保育の子どもたちの食糧不足が離乳食にもおよび、疎開先探しには、カルピス工場の近くを選ぶなど、内藤は多くの知恵を働かせてきた。

## 戦後の活動―戦後の混乱期から高度成長期へ

### ―新しい子どもの環境づくりと ヒューマンな病院長としての活動―

戦争終結の1945年には39歳になっていた。内藤の記憶によれば、当時GHQは、日本の子どもたちの状況を心配し

食糧の世話をするなど熱心であり、愛育村にも視察にいったという。

内藤はGHQに求められて新しい保育制度整備のための草案づくりに参入した。街には戦争孤児、浮浪児、空腹児があふれている中で、一方では、基本的人権を唱った新憲法ができ、児童福祉法ができ、というように、戦後の新しい子どもの環境づくりもまた、内藤の仕事として加わる。

やがて、経済が高度に成長していく中で、経済効率優先による森永ヒ素ミルク事件をはじめとして多くの公害病が出てきており、小児医学も、命と健康を守る立場から、診察室での診察を通して取り組むことはもちろんであるが、それとともに、子どもが生まれ育つ社会や地球環境にも目をおき、専門の立場から発言していくことが不可欠になり、子育て支援の方向も変化していった。

こうした視点は、内藤が小児科医者の他に、否、小児科医者の仕事そのものとして、保育者養成に力を入れる契機になっていったのではないかと推察される。

その後1949（昭和24）年日本赤十字病院からの強い要請を受けて小児科部長として赴任し、愛育村との関係も保ちつつ、診療活動に従事した。ここでは、GHQとの関わり深い病院だけに結核に効くスプレプトマイシンが手に入った。何とか命を助けたいと結核の少女にせつせと使い

見事に完治したが、多用すると聴力に影響が出るという副作用によってその子の聞こえに障害が残ってしまった。内藤はそのことを悔やみ続けてきた。しかし、女の子も両親も内藤の誠意のこもる治療を受け止め、後に小児科医と幸せな結婚をしたという。

日赤中央病院には、やがて内藤を受け継ぐ医師として、川崎病の発見者となる川崎富作がいた。また、インタビューでやってきた、その後東大小児科教授になる小林登や、日大小児科教授となる北川照男は、内藤の豊かな疾病知識、東京帝大医局時代に病歴室に通って力を付けたのであるが）に感服して、小児科を選んだとのことである。

日赤病院に7年おり、よいチームワークができる状況になつてきた矢先に、経営が立ちゆかなくなつた愛育会から、戻つて欲しいそして再建に力を貸して欲しいと熱望された。

小児科を専門とする病院が立ちゆかなくなつたとすれば、そして自分が必要とされるのならばと、妻の反対を押し切つて1956(昭和31)年に愛育病院院長、愛育研究所所長として、再び愛育会に赴任した。50歳の時であつた。

内藤の診療のすばらしさは人々の間に広がり患者が廊下にあふれるようになった。内藤は最前線で朝から夜遅くまで大活躍し、病院の運営は危機状態から脱することができた。職員達も皆忙しく働いた。

しかし、給料は思うようにはいかず、労働運動高揚期でもあり、労働組合が結成され医者達も加わつた。賃上げのストライキも行われた。逃げてしまつたり、今の賃金でももう少し頑張つてほしいという理事長に、病院を預かる院長として内藤は言つたという。「私も今の職員の俸給は安すぎると思う。せめて世間並みに近づけたいという職員の要求は普通のこと。普通の要求を通さないとおっしゃるなら私もやめる」と。その発言に理事長は折れ、この労働争議は組合の普通の要求が通つて結着した。

その後も、院長と労組の不思議な関係は続いたという。これは、団交では激しく論じ合う間柄であるが、奥底でどこか了解し合つているという関係である。医療現場で働く人の大きな尊敬と信頼があるからであり、労組が率先して還暦祝いの集いを企画したりということすらあつた。ここにも、愛育村でのフィールドワークでもおそろく育てられたであろう内藤のヒューマンな人柄がにじみ出ている。

その後の活動は省略するが、こうして、内藤の悲願であつた、乳児死亡率の低下は、戦争末期には1000対3桁を脱するところまでこぎつけ、60年には2桁下方の30・7となり、70年代には一桁となり、目標をついに果たすことができた。そして医療の方向は、予防としての食糧調達と栄養指導・治療としての薬から、「予防・早期発見・早期

治療」の時代へと向かっていく。

この方向を推進してきた内藤の歩みはまさしくシユバイ  
ツアー賞に値するものと誰の目からもわかるものであった。

## 白梅学園短期大学での講義等のこと

—子どもと「まなかう」小児科医者—

学生と「まなかう」教師—

内藤先生が白梅学園の教授になられたのは愛育病院再建  
のために、再度愛育会に院長・所長として戻られた翌年の  
1957(昭和32)年のことである。名誉教授となられた  
1987(昭和62)年の3月まで、実に30年間白梅学園で講  
義をもってこられた。その間、評議員と理事になられたこ  
ともある。また、1968(昭和43)年には保育専攻科長も  
引き受けられている。

愛育病院が専任なので、「どうして白梅と同時に」と不思議に思  
って尋ねたところ、当時は、こうした得難い功績のある方につ  
いては、兼任であっても非常勤ではなく特任教授とする制度が  
あり、先生の場合はそれに相当されていた。

当初しばらくは「小児保健」を担当されていたが、教  
務課の資料によると、後には新設された学科目の「乳児保  
育」も担当されていた経緯がみられる。

先生が初めて教授になられた頃の学生であった米山知恵

氏(元白梅保育園園長)は語る。「大変面白い授業をされ具  
体的でした。視聴覚機材は何もないのに赤ちゃんのよう  
すが目に見えるようで、赤ちゃんと関わってみたいとい  
う思いに駆り立てられました。また、身近な物や事は何でも  
すぐ教材とし

て生かされま  
す。例えば私

がおたふく風  
邪になったと

言うど皆にそ

の耳下腺のふ

くらみ具合を

見せ、『実習

のときうつ

っていたので

ね。潜伏期と

びつたり合う

でしょ。小

いときにか

つておくと軽

くて済むので

すが、そうで



1987年6月 白梅学園短期大学の同僚と(西ノ内多恵氏提供)

ない場合は、重くなりませう」と言うように」と。また、「白梅保育園では、顧問をして頂いており、嘱託医ではなかったのですが、時々子どもの健康具合を見て頂きました。初対面でも泣く子は全くいませんでした。それは、先生が『さあ見ましようね。』と前触れを出してからゆつたりと関わるからではないか、赤ちゃんもニコニコと先生を見つめていました」と。そして感心したのは聴診器を当てる前に自分の手で温めてから赤ちゃんの体に触っていたことだという。他にも、専攻科の時のエピソードなど聞き取りをしたが、紙幅の都合上省略する。

幼少期にすでにその兆しを見せていた保育者としての子どもへの関わり方への視点は「育児の基本は『まなかい(目と目を交わす)』にある」(『育児の原理』アツブリカ、参照)というところに結晶しているように思われる。そして、大学での講義の秘訣もまた学生との「まなかい(目交い)」にあるのではないかと教えられる。そうして学んだ学生達だからこそ、卒業後も保育の場でそれぞれに子どもと「まなかう」実践を展開し輝いているものと確信できる。

## おわり」

先生の足取りは、常に予防を重視しつつ、生命そのものを守り育てる活動から地域づくりへとまさにその時代の必

要をしつかりと受け止めて、地域の生活の中に入って親子の健康と発達を支援するという、子ども・子育て支援そのものであり、今日新たな意味で必要になってきている子育て支援への礎を築いてこられた歩みそのものではないか。しかもその中に、常に専門の中の専門である小児科医者としての「まなかい」の姿勢を貫いてこられているところに、人と人が対等に相互に支援し合うという、いつの時代にも変わってはならない「子育て支援」の真髄が読み取れる。

私どもは、21世紀のこれからを創っていくうえで先生の積み上げてこられたものから、何をどう学び、受け継ぎつつ創造していくか、始めに述べたようにできることなら今もお元気でいらつしゃるとお聞きしている先生を交えて実践しつつ討論し、研究的に大切な原則を引き出し、さらに討論を重ねつつ実践したいと強く思う。

最後に、基本となる『内藤寿七郎物語』から引用しつつ考察することを快く許容してくださった著者の丹羽洋子氏に、また、同書からの写真の掲載についてご快諾いただいた内藤先生と上記の書物からの写真の転用についてお骨折りくださった赤ちゃんとママ社に深く謝意を表する。